様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４６９

研究課題名（和文）モンゴル系の危機言語、保安語積石山方言にかんする調査研究

研究課題名（英文）A Linguistic Research of the Jishishan Bonan Language, Mongolian Endangered Languages

研究代表者
佐藤　暢治（SATO, Nobuharu）

広島大学・北京研究センター・教授

研究者番号：９０２６３６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究『モンゴル系の危機言語、保安語積石山方言にかんする調査研究』は、消滅の危機に瀕している保安語積石山方言を次世代に継承することに焦点をおいたものである。
　最大の成果は、約2100語を収録した『保安語漢語詞典』の完成にある。この辞典は現在保安語に関して利用できる最良のものであり、国際音声字母で作成されたものと、ピンイン式のローマ字で作成されたものの２種類がある。特に、後者は保安語の話者向けに作成されたものであり、保安語の継承においてきわめて重要な辞典である。

研究成果の概要（英文）：A Linguistic Research of the Jishishan Bonan Language, Mongolian Endangered Languages is focused on inheritance in the next generetions of the Bonan nationality.
 Most remarkable research achievement is "Bonan-Chinese Dictionary", including about 2200 words. This dictionary has two versions, IPA and Pinyin alphabet. Of these two, the latter is more important and useful in maintaining the Bonan language.

研究分野：言語学

キーワード：モンゴル系言語　保安語　危機言語

１．研究開始当初の背景

保安語積石山方言は甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治県大河家鎮に暮らす保安族 16,505 人(2000 年)によって話されているが、現在中国の多くの少数言語がそうであるように、漢語からの影響を日々蒙っている。実際にこの言語が話せるのは、保安族の総人口 16,505 人のうち、漢語との二言語併用話者である 3000 人から 4000 人程度と思われる。しかも、次世代を担う子供たちはさらに深刻な状況に直面しており、このままでは十分な言語記述もされないまま数世代後には消滅する可能性が高い。

この保安語積石山方言については、筆者が 2000 年以降 9 度にわたり現地調査をおこない、社会的・文化的背景とともに老年層から語彙、例文、民話などを収集してきた。それ以前は、1950 年代後半と 1980 年代に調査をおこなった Todaeva,B.X.(1964)《Baoanskij jazik》、布和 劉照雄(1982)『保安語簡志』、Li,Charles.N.(1983) "Language in Contact in Western China", *Papers East Asian Languages* 1、陳乃雄(1989)「保安語的語音和詞彙」『西北民族研究』2、陳乃雄(1990)「保安語的語音和詞彙」『西北民族研究』1 があるだけであった。

筆者の一連の研究により保安語積石山方言の研究は飛躍的に発展している。その評価については、鍾進文(2007)『甘青地区特有民族語言文化的区域特征』中央民族出版社などで詳細に述べられている。

しかし、調査の度に新たな発見が次々とあり、保安語積石山方言の研究はけっして十分とはいえない。また、次世代を担う若年層の保安語積石山方言は、音韻、語彙、文法いずれにおいても老年層のそれとは著しく異なってきており、保安語積石山方言を可能なかぎり、記録にとどめておくことはこの言語の研究に携わっている者の責務と考えている。口々に民族語である保安語の必える保安族の老人たちもまた、自分たちの言葉の研究はまだ始まったばかりなので、文字の策定をも含んだ継続的な調査を、筆者に求めている。特に、保安族の有力者である長老たちからは、自分たちが話しておきたいことすべてを記録しておいて欲しいとも言われている。

中国からは莫超 張建軍(2008)の手による『保安語常用詞漢英詞典』甘粛民族出版社が公刊された。しかし、これは非保安語研究者の手によるものであり、分析、表記がかなりずさんであり、ほとんど役にたたない。辞典については、すでに保安族唯一の若手研究者である馬沛霆氏と共ともに、母語話者が使える辞典を目指し、ピンイン式のローマ字に基づいた総語彙数約二千語からなる『保安語漢語詞典』(馬沛霆　佐藤暢治(2011)の試用版を完成させており、正式出版に向けて加筆修正の段階にある。

２．研究の目的

本研究『モンゴル系の危機言語、保安語積石山方言にかんする調査研究』の目的は、モンゴル系の危機言語、保安語積石山方言にかんして以下の三点を明らかにすることにある。

(1) モンゴル系言語のなかで調査研究が遅れている保安語積石山方言の全体像をフィールド調査を通じて社会的・文化的背景とともに記録し、その調査結果を公刊すること。

(2) 得られた成果を現地社会へ還元し、保安族の人々との連携のもと、当該言語における次世代への継承に協力すること。

(3) モンゴル系諸言語の歴史研究、言語接触研究に貢献すること。

(1)と(2)については、まだ十分とは言えない保安語積石山方言の言語資料の収集それ自体にすでに重要な意義がある。また同時に、仮にこれらの言語が消滅したとしても、保安語積石山方言という貴重な文化遺産を記録という形ではあるが、後世に残せるといった意義もある。

(3)については、保安語積石山方言は、モンゴル系諸言語のより古い言語特徴を保存継承すると同時に、チベット語や漢語などとの接触により、きわめて特異な言語変化をも経験している。そのため、保安語積石山方言はモンゴル系諸言語の歴史研究、及び言語接触研究においても重要な位置を占める。本研究で収集した言語資料が、モンゴル語言語学の歴史研究、さらには一般言語学に何かしらの貢献をする意義を持つ。

３．研究の方法

本研究の目的を達成させるために、常時、保安族社会と連携を保ち研究を推し進めていった。この間、保安族の若手研究者である馬沛霆氏とのメールのやりとりは百通以上に及ぶ。

そうした過程の中で、保安語積石山方言の話者から 2012 年 10 月には北京にて、2014 年 9 月には甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治県大河家鎮にて保安語積石山方言の調査をおこなった。

４．研究成果

研究成果については、すでに公刊（予定）あるいは口頭発表済みのものと、未公刊ではあるが、研究の過程で明らかにされつつあるものとに分けて記しておく。

まず、公刊（予定）あるいは口頭発表済みのものについて記す。

長年にわたり作成を続けてきた、上述のピンイン式のローマ字に基づいた馬沛霆 佐藤暢治編『保安語漢語詞典』が完成した。この辞典には、保安語積石山方言を中心に約二千二百語（方言差がある甘河灘方言の語彙も百

語余り）が収録されている。収録に際しては、漢語からの借用語と、保安語の本来語、あるいはチベット語アムド方言からの借用語が同義で使われている場合、漢語からの借用語は収録しないという馬沛霆の方針を用いた。これは、近年借用された漢語からの借用語はできるだけ排除し、保安語が古くから使っていた語をより多く収録するという考えにほかならない。

また、巻末には人称代名詞、数詞、積石山方言と甘河灘方言における方言対応語彙表が収められている。現在、中国北京の民族出版社において出版計画に上げられており、出版される過程にある。莫超 張建軍(2008)『保安語常用詞漢英詞典』甘粛民族出版社とは異なり、この辞典を保安族社会が有益に活用できれば、保安語社会が文字を持つことができる可能性を秘めたものである。今後は、このピンイン式のローマ字を用いた文法書の作成、絵本の作成等を計画している。

上とは別に、国際音声字母で記したものが、佐藤暢治 馬沛霆(2015)『保安語漢語詞典（国際音標版）』である。ピンイン式のローマ字に基づいた『保安語漢語詞典』との間には、甘河灘方言の語彙百語余りは巻末には記載されているだけで、辞典本体には記されていないという違いがある。

表記の仕方が異なるこの二つの辞典は、現在の保安語積石山方言の姿を表す唯一の辞典と言えるものである。

佐藤暢治(2015)『保安族の民族文化 保安腰刀』は、保安族の民族文化を代表する保安腰刀について論じたものである。保安腰刀は、保安族の言語文化を理解するうえで不可欠なものである。

本書は 6 章で構成される。第 1 章はプロローグ。第 2 章は「保安腰刀」の歴史。第 3 章は「保安腰刀」の名称、様式、分類であるが、ここでは「保安腰刀」14 種を取りあげ、個々の腰刀を写真で紹介したうえで、「柄」と「鞘」における様式の違いに注目し、個々の腰刀がどのように分類されているのかを明らかにしている。第 4 章は甘河灘村の老人が保安語で語った「保安人の腰刀」という話を紹介し、その話から制作者である保安族が保安腰刀をどのように認識しているのか、また、そこで語られた保安腰刀の部位名称、製作にかかわる語彙を整理している。第 5 章は「保安腰刀」が描かれた民話を数話紹介し、これらの民話の中で保安腰刀が重要なモティーフになっていることを論じている。第 6 章はエピローグである。

「保安腰刀」について、これまで詳細に論じたものは国の内外を問わず、本書が初めてである。

佐藤暢治(2014)「保安語積石山方言における接語 mu」は、不定語や名詞に後置される接語 mu（出自はチュルク系言語）の用法を明らかにしたものである。接語 mu には、次の三つの用法がある。保安語積石山方言の表記は、『保安語漢語詞典』で用いているピンイン式のローマ字表記である。

(1) 接語 mu は不定語に後置され、全称を表す。

kamu madeji gine.

誰も知らない。

(2) 接語 mu は名詞に後置され、動詞句あるいは文をとりたて極限を表す。

Baijing hulungghale terung mu itejio.

北京は暑いので、頭さえ痛い。

(3) 接語 mu は名詞に後置され、その名詞をとりたて類似複数を表す。

Agu mu

母たち

(3)でいう類似複数とは、近似複数を表す-la とは別のものである。息子と娘と妻で構成された集合から息子と娘だけを言い表すとすれば、たとえば agula「娘たち」とは言えても、*agu mu とは言えない。agu mu だと、mu が持つ網羅性の性格から amo「母」をも含むことになる。息子と娘と妻全体を表すのであれば、捉え方は異なるが、agula とも agu mu とも言える。agula は「娘とその家族」という捉え方であり、agu mu は「娘と家族という共通の属性で結ばれた息子と母」という捉え方である。

三つの用法のうち、(2)と(3)が初めて論じられたものである。保安語積石山方言における接語の mu には不定語における全称、限界、類似複数という三つの用法から見て、共通の属性を持つ網羅的な全体集合を表すと見てとれる。(1)と(2)はチュルク系の言語にも認められる。したがって、チュルク系の言語から取り入れられたものが発展し、集合全体を表すという特徴から、保安語積石山方言が発展していくなかで類似複数をも表すようになったと考えられる

佐藤暢治(2013)「保安語積石山方言における一人称複数代名詞の包括形と除外形－その区別と逆転－」は、包括形 mange（語構成は属格 mane に所有を表す-ge）と除外形 buda にかんして二つの問題を論じたものである。

その一つ目は、包括形と除外形の使い分けについてである。保安語積石山方言における包括形と除外形の使い分けは、必ずしも話し手側に聞き手を含む、含まないという教科書的な区別ではない。話し手が属する家族、村、民族のような恒常的な集団の場合、聞き手を集団外の対象と見なし包括形が使われることがあることを明らかにしている。また親族名詞は、包括形と除外形の属格形とは通常共起しないことをも明らかにした。これは、保

安族が家族とそれよりも大きな集団との間で集団にかかわる捉え方が違うことを示している。

二つ目は、保安語積石山方言における包括形と除外形がモンゴル祖語の包括形 bida と除外形 ba と逆転した関係にあるが、その逆転の過程についてである。逆転の過程として、次が考えられる。最初の段階として、包括形と除外形の区別が消滅する。包括形は中立的な意味になり、除外形は生き残った属格形等が「話し手が属する恒常的な集団」を表すようになる。ここでの「話し手が属する恒常的な集団」に、聞き手は関与しない。聞き手は「話し手が属する恒常的な集団」の一員あれば必然的に話し手側に含まれ、そうでなければ話し手側に含まれることはない。次の段階として、「話し手が属する恒常的な集団」を表すようになっていた元々の除外形が包括形へと変化し、それに伴い、中立的な意味になっていた元々の包括形は除外形になった。この段階における変化の引き金は社会変化と考えられる。つまり、家族から集団が大きくなっていくにつれて、社会の要請により聞き手が自分の側なのかそうでないのかが重要になり、「話し手が属する恒常的な集団」を表していた形式は包括形となり、除外形との区別を持つようになった。

包括形と除外形の逆転は、通言語的にも興味ある現象として位置づけることができるものである。

次に、研究の過程で明らかにされつつあることについて、特に三点を取りあげ、その概要を記しておく。

一つ目は証拠性に関わることである。保安語には、話し手(疑問文では聞き手)が文の表す事態を内的なものとして捉える「主観」形式と、外的なものとして捉える「客観」形式の 2 つの範疇がある。この関係は、たとえば叙述文、所在文では叙述の助動詞 i/o で表され、存在文、所有文では存在の助動詞 wi/wa で表される。

このとき「情報」と「私的体験」が重要なキーワードになるが、「主観」形式と「客観」形式の使い方について、詳細は今後の研究に委ねられはいるが、村あるいは年代によって異なる可能性が見いだされている。自分に関わることであれば、「主観」形式が使われることが多いが、ある条件（文中に出てくる対象が話し手と聞き手の眼前にある場合等）のときには話し手にかかわることであっても、「客観」形式を使う人々がある。

これは保安族社会の言語文化を探るうえで重要な一要素になる可能性もあり、「主観」形式と「客観」形式の使い方については今一度整理し、考察する必要がある。

二つ目は、チベット語アムド方言との言語接触にかんすることである。保安語積石山方言に観察されるチベット語アムド方言からの借用語は、保安族の祖先が現在の青海省黄南蔵族自治州同仁県に暮らしていたときに由来するものであり、今から 150 年ほど前までの出来事を反映するものである。これまでの資料からではわからなかったが、『保安語漢語詞典』には従来知られていなかった語が多数収録されており、チベット語アムド方言からの借用語も例外ではない。こうした借用語を通じて、当時の保安族とチベット族との間がどのような関係にあったのかが、今まで以上にはっきりとしてきている。これまで考えられていたよりも、保安族の祖先はさまざまな面でチベット族との間に関係を持っていたことがうかがわれる。

三つ目は、保安語の周辺で話されている他のモンゴル系言語、東郷語、土族語、康家語、東部裕固語、あるいはチュルク系の撒拉語との史的関係についてである。これも、『保安語漢語詞典』に収録された、これまで知られていなかった語の存在によって明らかにされつつあることがある。共通する出自不明の語の存在をどのように位置づけていくかが、今後のおおきな課題となる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

1. 佐藤暢治、保安語積石山方言における接語 mu、東アジア言語研究 14、2014、1-13、査読有

〔学会発表〕（計　1 件）

1. 佐藤暢治、保安語積石山方言における一人称複数代名詞の包括形と除外形－その区別と逆転－、日本言語学会第 147 回大会、2013 年 11 月 23 日、神戸外国語大学（兵庫県神戸市）

〔図書〕（計　2 件）

1. 佐藤暢治 馬沛霆、保安語漢語詞典（国際音標版）、広島大学中国学プロジェクト研究センター、2015、1-87
2. 佐藤暢治、保安族の民族文化 保安腰刀、広島大学中国学プロジェクト研究センター、2015、1-78

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　暢治（SATO NOBUHARU）
広島大学・北京研究センター・教授
研究者番号：９０２６３６５７